

終活

自分と愛する人のために 考え、準備し、実践すること

「終活」という言葉がよく聞かれます。それは自分が生きている現実を見直し、自分の死後に家族が困らないように、自分にできる準備をしっかりと、より良い最期を迎えたいという意識が、人々の間に広がっているからではないでしょうか。

この企画は「キリスト教」という視点から、「終活」について考えていきます。4人の方々の経験と知識を通して、自分の人生を広い視点から振り返り、少しでも安心して最期を迎える準備の機会が、参加者の皆様に与えられることを切に願っています。

関心のある方はどなたでもご参加ください

日時 6月 毎火曜日 10時～11時30分
場所 カトリック大名町教会 1階講堂
参加費 無料

6月3日 「いざという時のために」 安河内晴香

信者さんの葬儀ってどうするの？と福岡では、故人様だけやご家族様だけが洗礼を受けている方が多く、不安を抱えておられる声が聞かれます。私たちは、教会の信徒さんも共同体として、通夜・葬儀ともに教会で行うことを推奨しています。その他、費用も含め、具体的な準備に何が必要かお話しします。プロフィール：西新教会所属。兄は福岡教区の谷口神父。国内外で幼児教育に8年従事し、様々な方との出会いをきっかけに葬儀業へ転職。大手葬儀社にて6年勤務の後、教会専門の葬儀社みこころ舎に入職。1級葬祭ディレクター。

6月10日 「老いを受け容れ、死を迎え入れる心を作る」 原口芳博

① 老年期に起こる様々な喪失体験と悲嘆に対するケア。②高齢者の「7つの発達課題」。③死を迎え入れていく通過儀礼。④信仰生活を豊かにする道具としてのAAの「12のステップ」。これらを通し、死を迎え入れるための心作りを提案します。プロフィール：長崎市生まれ、上智大学大学院教育学専攻修士課程修了、元福岡女学院大学人間関係学部長、元福岡カトリック神学院講師 現在原口カウンセリングルーム所長。臨床心理士・公認心理師・精神保健福祉士。

6月17日 「キリスト者にとっての死の意味と永遠の命」 大山悟

キリスト者の死はキリストの死に結ばれている。肉体の死は「見える命」から「見えない命」への展開を意味する。キリストは自分の死を通して死を聖なるものとした。すなわち死を永遠の命にいたる不可欠な事態とした。プロフィール：長崎県平戸に生まれ。1984年司祭叙階。大分教区司祭。ローマ・グレゴリアン大学に哲学研究、聖トマス大学にて神学研究。福岡大神学院、日本カトリック神学院東京キャンパスにて司祭養成従事、臨床パストラル教育研究会代表。スピリチュアルケア指導師。

6月24日 「生きることは死ぬこと・死ぬことは生きること」 柴田須磨子

娘の死からの歩みと活動死と隣り合わせに生きることになった30代後半から娘の死を体験し・様々な「生と死」との関りを生きることになり、そこから導かれて今日までの30年の活動の中での様々な出会い気づき感動をお伝えできたらと思います。プロフィール：看護師 がん哲学外来コーディネーター。精神科病院・グループホーム・A型事業所サービス管理などを経て現・福岡ホスピスの会がん哲学外来ぬくみカフェ・虹の会、西新教会に所属。

主催 カトリック福岡教区宣教養成委員会

